

シリーズ・【馬電の思い出】

④ 大雹害

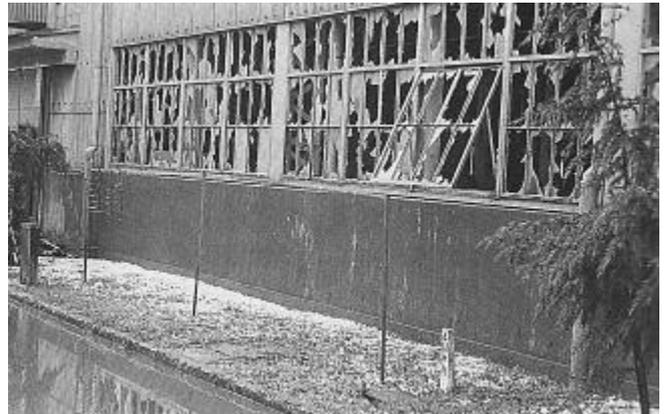
大槻伸次



昨今、温暖化の影響と思われる異常気象が各地で多発しているが遡ること44年前の昭和38年5月26日水曜日、尾島を中心とするこの地方は空前絶後の大雹害に見舞われたのだ。そこで、その当時の日記を紐解いてみた。

その日家に帰って、降雹の様子を親父に話すとそんなに凄い雹が降ったのは覚えがないといていた。群馬製作所（4月より菱電機器尾島工場から三菱電機群馬製作所になったばかり）では、工場の窓ガラスは跡形なく破損した（右の写真）。また、スレート屋根は狂風で煽られ大破損するなど凄い被害だった。また、尾島町周辺では農作物が壊滅的な損害をこうむった。

幸いだったのは、この頃はまだモータリゼーションの前で従業員は殆んどバス通勤だったので自家用車の個人的な損害はなかったのは幸いだったろう。



今日は朝から尋常な蒸し暑さじゃない。昼頃から久しぶりに空は晴れあがり、暑さといい、湿気といい真夏を思わせる天気になった。工場の窓越しに吹きこむ南風は、土と緑の香りをいっぱいふくんだなんとも不思議な南風だった。ところが、午後4時30分頃から急激に雲行きが怪しくなりあつという間に空は真っ黒になった。夜がきたかと思えるほど真っ暗になった。すると、突然のこと突風を伴って雨と鶏卵大の「雹」がガラガラと音をたてて降り始めた。余りの急な出来事に工場の窓を閉めるのも間に合わぬほどだった。あつという間に工場の窓という窓のガラスはほとんど打ち砕かれた。

また、我々のいた工具工場の西端のスレート屋根もめりめりと狂風にはがされていき雹による大きな穴がポツポツとあいた。雷鳴とその雹の凄さ、恐ろしさに改めて溜息が出た。平松主査も驚きのあまり声も出ず、ただ工場を駆けずり回りおろおろするばかりだった。夕立が止んでから、工場周辺を点検して歩くと吹き溜まりには、鶏卵大の「雹」が山のようになっていてシャベルですくえるほどに溜まっていた。

この夕立は、利根川周辺の尾島町、深谷市などが一番ひどかったようで尾島町では死者が3人と報道された。尚、われわれの職場では凶面や書類が雨と強風にあおられぐしゃぐしゃ状態でどこから手をつけていいのかわからないほどだった。

工場では、夕立が止んでから一応自分の作業場の整理をやり工具類に油を注し錆止めの応急処置をして帰宅した。この様子では自宅（太田市内）はどうしたか心配しながら帰宅したが突風と雨には見舞われたが雹は降らず農作物への被害は少なかった。

翌日、職場にて1日中ガラス破片の片付けをしたがあまりの被害の大きさに改めて驚ろいた。尾島町では野菜や大麦、小麦は全滅し災害救助法が発動されたと新聞が報じていた。また、復旧に自衛隊も出動したとある。

尚、実家のある太田市内の状況は雹の被害はなかったが風雨が強かったので麦はほとんど倒伏したようだ。

あれから44年、幸いこの地方は大きな災害はないが昨今の温暖化の影響等を考えて物心両面の災害に対する備えは肝要だろう。